

田原市図書館 ふしぎ文学半島プロジェクト

「ふしぎ文学マスターが薦める100冊」選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

◆はじめに

ふしぎ文学——摩訶不思議な出来事を描いて、読者を驚歎させたり恐怖せしめたりする文芸作品は、洋の東西を問わず、はるか古代から現代に至るまで、連綿と受け継がれてきた。

幻想文学、怪奇小説、幻想小説、メルヘン、ファンタジー、ホラー、怪談文芸……呼び方はさまざまだが、内なる想像力と言霊（ことだま）を駆使することで眼前の現実を超えた世界を追い求めてやまない「ふしぎ作家」たちの系譜は、おそらくはこの先も未来永劫、尽きることはあるまい。

もとより「ふしぎ文学半島プロジェクト」が中核に位置づけている泉鏡花と柳田國男は、かたや絢爛たる実作において、かたや深遠なる蘊蓄において、日本が生んだ「ふしぎ文学」の頂点を極めたと云っても過言ではない大家たちであった。

このほど田原市中央図書館に新設された「泉名月記念 ふしぎ図書館」のコーナーに收藏される「ふしぎ文学マスターが薦める100冊」を選ぶにあたり、アンソロジストを生業とする私は、過去に日本で編纂刊行されたアンソロジーの中から、この分野を展望するに相応しい名著の数々を、能うかぎり集結させる方針で臨んだ。

アンソロジーこそは、最良の入門書であると信ずるからである。

それと同時に、ふしぎ文学世界を探究する旅人たちにとって、頼もしき地図や羅針盤の役割を果たすであろうレファレンス・ブック（事典／ガイドブック）と評論／研究／エッセイの名著についても、これだけは欠かせないと思う書目を併せ収めることにした。

かくして田原市の「ふしぎ図書館」には、古今東西にわたる膨大な数の「ふしぎ物語」群と、「ふしぎ文学」をめぐるデータベースが、リアル空間に集結することとなった。

願わくは、この100冊（分冊やシリーズも1冊にカウントさせていただいた）が、書物に親しみ、文学を尊び、なにより摩訶不思議な物語を愛してやまない読者を、そして未来のふしぎ作家たちを育む、夢の播種（はしゆ）とならんことを！

東 雅夫

まずは、ここから歩みだそう！——はじめの十歩

1. 『世界幻想文学大全』（全3巻） 東雅夫編 ちくま文庫

※ラヴクラフト「文学と超自然的恐怖」、カイヨワ「妖精物語からSFへ」をはじめとする基本文献を収める『幻想文学入門』、怪奇系と幻想系それぞれの代表作を名訳で収める『怪奇小説精華』と『幻想小説神髄』で構成された、究極のふしぎ文学入門3点セット！

2. 『暗黒のメルヘン』 澁澤龍彦編 立風書房

※『東西不思議物語』と銘打つ著書もあるとおり、偉大なるふしぎ文学マスターであった著者が精選した極上の日本幻想文学アンソロジー。セレクションといい配列の妙といい達意の編集後記といい、アンソロジーのお手本、ここにあり。ちなみに、我がアンソロジスト人生を決定づけた

運命の書でもある。

3. 『新・ちくま文学の森2 奇想天外』 池内紀ほか編 筑摩書房

※編者の帯文に曰く——「思イハカラレヌコト、コレヲ不思議トイフ」。そう、本書はまさしく「ふしぎ」な出来事の数々に照準を定めて入念にセレクトされた、古今東西の文芸アンソロジーなのだ！ ふしぎ文学のイロハを会得するために。

4. 『ちくま文学の森7 恐ろしい話』 池内紀ほか編 筑摩書房

※ひとくちに恐怖といっても、その内実は現実的なもの超自然的なものなど色々あるが、本書は一読、思わず「ゾットする」物語の多様なバリエーションを一巻に凝縮したアンソロジー。文芸がもたらす怖さにも、さまざまな違いがあることを教えてくれる。

5. 『贈る物語 Terror』 宮部みゆき編 光文社

※当代きってのストーリーテラーである編者は、大のホラー好きでも知られる。本書は歴代の名アンソロジーに収録された作品の中から、とりわけ編者の恐怖の琴線に触れた逸品のみを厳選収録した、いわばアンソロジーから生まれたアンソロジーであり、英米ホラーへの誘いにしてアンソロジーへの誘いの書でもある。

6. 『岡本綺堂読物選集7 翻訳編・上』(支那怪奇小説集) 岡本綺堂 青蛙房

※伝統ある中国の志怪・伝奇小説は、まさに「ふしぎ文学」としか云いようがない玄妙にして奇天烈な味わいを有する話の宝庫である。怪談文芸の大家が選び抜き、達意の訳文で紹介する奇古なる物語の数々を、じっくりと堪能されたい。読み進めるうちに意外な発見も!?

7. 『岡本綺堂読物選集8 翻訳編・下』(世界怪談名作集) 岡本綺堂 青蛙房

※海外の怪奇小説を一冊で総覧することができる入門アンソロジーとして、昭和の初めから現代に至るまで、不朽のロングセラーとなっている基本図書。怖さのツボを心得た綺堂一流の訳文が、いまだにいささかも古びた印象を感じさせないのは真に驚歎に値する。

8. 「小説とは何か」(『文豪怪談傑作選 三島由紀夫集』に収録) 三島由紀夫 ちくま文庫

※1970年11月の衝撃的な自決直前まで雑誌に連載された長篇エッセイ。著者は『神州瀕瀕城』や『遠野物語』や『山本五郎左衛門只今退散仕る』を、「これこそが小説だ!」と熱烈推奨してみせる。戦後文学の旗手による幻想文学宣言の書としての衝撃性は、今も色褪せていない。

9. 『思考の紋章学』 澁澤龍彦 河出文庫

※おそらくは三島由紀夫の死を一契機として、日本の伝統文化や文学にそれまで以上に積極的言及をおこなうようになった著者の、最初のめざましい結実というべき名エッセイ集。『小説とは何か』への言及から始まる「ランプの廻転」以下、古今東西の偏愛的事象を自在に逍遙し、読者を摩訶不思議なドラコニアン・ワールドへと誘ってやまない。

10. 『偏愛文学館』 倉橋由美子 講談社

※戦後幻想文学を代表する書き手のひとりであった著者が、その早すぎる晩年に綴った、偏愛する書物と作家をめぐるエッセイ集。歯に衣着せぬ率直な書きぶりは痛快の一語だが、その背後に見え隠れする、幻想文学への愛と造詣の深さに何より心打たれる。

アンソロジー（国内篇）

11. 『幻妖のメルヘン』 澁澤龍彦編 現代思潮社

※古典から現代まで、日本文学における幻想と怪奇の流れをたどる系統的なアンソロジー。初読の際、謡曲やオカルト・ルポルタージュ、民俗学までを視野におさめたスタンスの闊達さに驚嘆させられた。そのいずれにも、編者の嗜好と卓抜なセンスが横溢している。

12. 『日本幻想文学大全』（上下） 澁澤龍彦監修／幻想文学会編 青銅社

※幻想文学会の一員として、私が生まれて初めて手がけた思い出深いアンソロジー。監修をお願いした澁澤さんに、候補作リストをお目につけたときの緊張感といったら、もう！ 泉鏡花「化鳥」に始まり澁澤龍彦「ねむり姫」まで、硬質な幻想文学の系譜をたどる。

13. 『現代怪奇小説集』（上下） 紀田順一郎・中島河太郎編 立風書房

※怪奇幻想文学研究の泰斗と探偵小説研究の泰斗が、ガッツリ四つに組んで編み上げた夢のコーポレーションというべき大冊。「怪奇エンターテインメント」に重きを置いた日本近現代小説の系統的アンソロジーとしては、いまだに本書を超える規模のものは無い。

14. 『日本怪奇小説傑作集』（全3巻） 紀田順一郎・東雅夫編 創元推理文庫

※私にとって原点のひとつである創元推理文庫版『怪奇小説傑作集』の日本版を作りたい……敬愛する紀田順一郎先生のお力を借りて、積年の願いを叶えることができた三巻本アンソロジーである。『現代怪奇小説集』と併せて読めば、万全だろう。

15. 『新青年傑作選』（全5巻） 中島河太郎編 立風書房

※戦前の日本で怪奇幻想小説の一大拠点となった伝説の雑誌『新青年』の全貌を、ジャンル別に編纂構成した労作。優れた雑誌が、時代の空気を今に伝えるタイムカプセルであることを教えてくれる。怪奇幻想／恐怖小説を収めた2と3以外の巻も、読みどころ満載ですぞ。

16. 『怪奇探偵小説集』（全3巻） 鮎川哲也編 双葉文庫

※名作選や傑作選ばかりがアンソロジーではない。本書は、怪奇と猟奇と探偵趣味の申し子もしくは鬼子というべき怪作・奇作・珍作ばかりを、愛情こめて発掘・蒐集・編纂して成った異色のアンソロジー・シリーズ。B級ならではの得がたい味わいを知るべし。

17. 『異形の白昼』 筒井康隆編 立風書房

※星新一、遠藤周作、小松左京、曾野綾子、吉行淳之介……著名な人気作家たちが、実は世にも怖ろしい物語の名手でもあることを教えてくれる、至高の現代恐怖小説集。『暗黒のメルヘン』と並んで、戦後世代に多大な影響を与えた名アンソロジーである。

18. 『幻覚のメロディ』 眉村卓選 集英社文庫

※『異形の白昼』と共通する顔ぶれだが、こちらは日常生活の背後に見え隠れする幻視や幻覚を描いた作品のみに特化して編まれた、史上稀なるアンソロジー。まさに、「ふ～し～ぎ～！」としか云いようのない読書体験を味わわせてくれるに違いない。

19. 『実験小説名作選』 筒井康隆選 集英社文庫

※小説や言語の実験に果敢に挑んだ近現代日本作家の作品を収めた、ユニーク極まるアンソロジー。「小説とは何をどのように書いてもいいものだ」という文豪森鷗外の言葉を再認識させるかのごとき、多様な可能性を孕んだ一巻といえよう。

20. 『紅い花 青い花』 吉行淳之介監修 北宋社

※本書に始まる〈イメージの文学誌〉は、若き日の堀切直人が企画編集を担当した画期的なテーマ・アンソロジー叢書だった。本書には、近現代日本作家の手になるフローラ（植物界）幻想の

精華が収められている。まさしくアンソロジーという字義通りの「精華」集だ。

21. 『水底の女』 島尾敏雄監修 北宋社

※本巻のテーマは、水妖幻想。「南国の水精」「月下の仙女」「北溟の妖魚」「水源地を捜す」「混沌のわだつみへ」という各章のタイトルからして、もう、ワクワクさせられるではないか。詩作品への目配りが利いているのも嬉しいところだ。

22. 『幻想飛行記』 埴谷雄高監修 北宋社

※人類にとって長らく憧れだった「空を飛ぶ夢」の物語を一巻にコレクション。随処に装画として掲げられた古今東西の幻想絵画の数々がまた、読む者の想像力を遺憾なく掻きたてる。居ながらにして、想像力の空中散歩を存分に愉しもう。

23. 『動物の謝肉祭』 澁澤龍彦監修 北宋社

※『紅い花 青い花』のフローラに対応するファウナ（動物界）幻想の物語集。「魚の章」「虫の章」「鳥の章」「獣の章」から成る。達意のセレクションに唸られること請け合いである。動物園や水族館、昆虫館を心ときめかせながら巡回する感覚で、どうぞ。

24. 『モダン都市文学4 都会の幻想』 鈴木貞美編 平凡社

※1920～30年代日本の都会風俗を反映した文学作品を対象とするアンソロジー叢書の一巻。モダニズムの高揚とともに、ハイカラな街角に解き放たれた想像力の諸相を展望させてくれる。見知らぬ町歩きの愉しさに似た読書体験を満喫していただきたい。

25. 『鬼譚』 夢枕獏編 立風書房

※人にして人ならざるもの——異形／アウトサイダーの宿命を負った「鬼」たちを描いた物語のアンソロジー。『今昔物語集』から手塚治虫まで、現代における鬼譚の名手たる編者が偏愛する小説や漫画、さらには小松和彦と内藤正敏による対談などを収める。

26. 『陰陽師伝奇大全』 東雅夫編 白泉社

※オカルト・ジャパネスクの象徴的な存在として1990年代に大ブームを巻き起こした「陰陽師」が登場する幻想伝奇小説を、古典から現代の漫画作品まで幅広く集大成したアンソロジー。日本的な魔法使いのファンタスティックな活躍ぶりを堪能していただきたい。

27. 『神隠し譚』 小松和彦編 桜桃書房

※恐ろしくも哀しく、どこか懐かしさをも掻きたてる「神隠し」現象の怪しさ不思議さを描いた物語を、妖怪民俗学の第一人者が選りすぐったアンソロジー。ふしぎ文学ならぬ「ふしぎ民俗学」への入門書としても、十二分に機能することだろう。

28. 『稲生モノノケ大全 陰之巻』 東雅夫編 毎日新聞社

※備後三次の稲生家で起きた一大妖怪事件は、江戸期を代表する怪談実話として名高く、絵巻物や後には講談などでも巷間に流布した。本書はその原典から、泉鏡花、折口信夫、稲垣足穂ら近現代の文学者による作品までを集大成したアンソロジー。ひとつの異常な出来事が書き留められ、絵画に描かれ、物語られ、やがて多くの文芸作品を生み出してゆく光景は感動的でさえある。

29. 『日本古典文学幻想コレクション』（全3巻） 須永朝彦編訳 国書刊行会

※「奇談」「伝綺」「怪談」の三分冊から成る、現代語訳アンソロジー。中古の説話から江戸文芸に至るまで日本の古典文学を「幻想と怪奇」や「ふしぎ文学」の視点から読もうとする向きは、まずはここから。原文の味わいを能うかぎり残した苦心の現代語訳である。

30. 『日本の古典 2 4 江戸小説集 1』 円地文子・寺山修司ほか訳 河出書房新社

※戦後日本を代表する文学者たちが、近世の怪異小説集や長篇読本の現代語訳に挑んだ画期的なアンソロジー。上田秋成×円地文子、浅井了意×富士正晴、山東京伝×寺山修司といった取り合わせの妙よ！ とりわけ寺山訳のやりたい放題は壮絶で、面白すぎる名調子。

31. 『日本怪談集 江戸編』 高田衛編訳 河出文庫

※四谷怪談の実録版「四谷雑談集」、清玄桜姫物の源流たる「勧善桜姫伝」、林屋正蔵の怪談断……近世日本幻想文学研究の泰斗である編者が、江戸怪談文芸の粋を平易な現代語訳で一巻にまとめたアンソロジー。古文は苦手……という怪談ファンは、まずはここから。

32. 『江戸怪談集』(全3巻) 高田衛編 岩波文庫

※『奇異雑談集』『伽婢子』『諸国百物語』『因果物語』……江戸怪談の基本型が定立しつつあった17世紀に上梓された代表的怪談集11点を精選し、それぞれ出色の話を抄出して脚注付きの三巻本に構成。近世怪談の全容を知るには最適のアンソロジーである。

33. 『近世奇談集成 1 叢書江戸文庫 2 6』 高田衛ほか校訂 国書刊行会

※泉鏡花らに多大な影響を与えた『老媪茶話』、近世怪談集の大なる草分け『宿直草(御伽物語)』、異色の怪談実話ルポルタージュ『死霊解脱物語聞書』という各々タイプの異なる近世奇談随筆の名作3篇を完全収録したアンソロジー。奇談入門に格好の一巻だ。

34. 『近世民間異聞怪談集成』 堤邦彦・杉本好伸編 国書刊行会

※江戸中期に入ると幕府の文化政策により地方文人が輩出、彼らは好んで地元の怪異伝承を調査蒐集し筆にした……こうして誕生した日本各地の怪談集を一巻に集成した大冊が本書だ。近世の怪談列島ニッポンを紙上で旅するがごとく、愉快的なアンソロジーである。

35. 『日本庶民生活史料集成 1 6 奇談・紀聞』 森銑三・鈴木棠三編 三一書房

※ふるさと怪談の源流たる尾張の『想山著聞奇集』や津軽の『谷の響』、近世奇談随筆の雄篇『耳囊』全話復刻(!)などに加えて、平田篤胤によるオカルト・ルポルタージュ『勝五郎再生記聞』なども収める重量級の近世ふしぎ実録アンソロジー。

36. 『日本怪談集 幽霊篇』(上下) 今野圓輔編著 中公文庫

※柳田國男と折口信夫に師事した編者が、本業であるジャーナリストとしての知見を活かしてまとめたユニークな怪談実話本。新旧の新聞雑誌記事を丹念に渉猟することで得られた幽霊関連の目撃談や体験談をタイプ別などに分類し、解説を交えて採録している。淡々とした報道記事の連なりが、いつしか底深い畏怖と恐怖を喚起すること請け合いである。

37. 『日本の名随筆 怪談』 高橋克彦編 作品社

※こちらは古今の著名な文化人が、随筆中に書き留めていた怪異の記録を、丹念に蒐集編纂した好アンソロジー。あの文豪や、この名優が、大真面目に、ときには畏敬の念すら籠めて綴る「本当にあった」怪談奇聞のリアリティは、また格別であることよ。

アンソロジー (海外篇)

38. 『怪奇小説傑作集』(全5巻) 創元推理文庫

※永遠のスタンダードといってもよい不朽のアンソロジー。かく申す私も本書と出逢わなければ、怪奇幻想文学を生業とすることはなかったはずだ。英米怪奇小説の多彩な変遷をたどる1~3、

フランス産の奇想／暗黒小説を収める4、重厚なロシアとドイツの怪奇小説集である5……どこから読むかは、お好みで。平井呈一、澁澤龍彦らの名解説も必読。

39. 『怪奇幻想の文学』(全7巻) 新人物往来社

※平井呈一、紀田順一郎、荒俣宏という英米怪奇幻想文学紹介の先覚者三大人が総力をあげて成った、空前絶後の一大アンソロジー叢書。吸血鬼、魔術、ゴシック、ホラー、怪物、神秘、幻覚というテーマごとに、定評ある名作佳品が収録されている。英米の怪奇幻想文学／ふしぎ文学を極めるならば、一度は通読すべきシリーズである。

40. 『こわい話・気味のわるい話』(全3巻) 平井呈一編訳 沖積舎

※系統的なアンソロジーも重要だが、一方で、編者の好みそのままに編まれた偏愛的アンソロジーを読む愉しみも無類である。英米怪奇小説翻訳の名匠・平井呈一が、その晩年、気随気ままに好きな作品ばかりを訳し収めた本書は、その最右翼に位置するものだ。「一對の手」「色絵の皿」「南西の部屋」などのジェントル・ゴースト・ストーリーは、どれも一読忘れがたい余韻を残す。

41. 『怪談の悦び』 南條竹則編訳 創元推理文庫

※平井翁の良き伝統を今に受け継ぐ職人的翻訳家のひとりが、畏友・南條竹則である。タイトルのとおり、とっておきの英国ゴースト・ストーリーを、いかにも愉しみながら訳して、同好の士に贈ることの悦びが伝わってくるアンソロジーなのだ。解説も味わい深い。

42. 『怪奇小説の世紀』(全3巻) 西崎憲編 国書刊行会

※本書の編者もまた、平井呈一の申し子のひとりといえようか。先輩たちの仕事をうけて、同好の訳者陣とともに、よりマニアックに英米怪奇小説のさらなる奥地へと分け入り、素晴らしい収穫の数々をもたらしてくれた。やや上級読者向けか。

43. 『世界恐怖小説全集12 屍衣の花嫁』 平井呈一編訳 東京創元社

※怪談実話ならぬ怪奇実話（とはいえ、両者はほぼイコールといってよいのだが）のアンソロジーとして、唯一無二といってよい名著。怖い実話が日本と同様に、ひとつのジャンルとして成り立っている大英帝国が生んだ膨大な名著の中から、いろいろなスタイルを代表する好例が訳出紹介されている。怪奇小説好きのひとつの到達点かも知れない。

44. 『諸国物語』 森鷗外編訳 国民文庫刊行会

※文豪鷗外は若き日のドイツ留学中から丹念に現地の新聞雑誌に目を通し、最新のヨーロッパ文学事情に通暁していた。その蘊蓄を活かした欧米小説・戯曲のアンソロジーである本書には、シュトローブルの「刺絡」、ポオの「うずまき」をはじめ多くの怪奇幻想譚が含まれている。書名が近世日本の諸国奇談集を連想させる点にも注目して読みたい。

45. 『毛虫の舞踏会』 堀口大学訳 講談社

※名訳詩集『月下の一群』で名高い編者が、動物たちの登場するフランス幻想文学の名作佳品を蒐めて訳したアンソロジー。元版刊行は1943年——太平洋戦争の真只中、かくも浮き世離れた物語集を世に出した粹と反骨の心意気に、万雷の拍手を！

46. 『ドラキュラ・ドラキュラ』 種村季弘編 薔薇十字社

※専門のドイツ文学のみならず、古今東西の珍奇幻妖なる文学の目利きであった編者の名を最初に知らしめたのが、伝説の雑誌『血と薔薇』創刊号に始まる一連の吸血鬼関連エッセイである。本書はその副産物ともいべき吸血鬼文学アンソロジーで、ホラー系のオーソドックスな類書とは、ひと味もふた味も異なるセレクションで唸らせる。

47. 『ダブル／ダブル』 マイケル・リチャードソン編 白水uブックス

※もしも自分がもうひとり別に存在したら……「分身（ドッペルゲンガー）」もまた、「吸血鬼」や「変身」などと並んで、ふしぎ文学における最重要テーマのひとつである。本書にはアンデルセンからコルタサルまで、幅広い分野の代表的作例が収録されている。

48. 『ク・リトル・リトル神話集』 荒俣宏編 国書刊行会

※米国ホラー中興の祖ラヴクラフトが創始した、クトゥルー神話大系（クトゥルーにはクトゥルフ、ク・リトル・リトルなどの異称あり）に属する代表的作品を収めたアンソロジーの嚆矢。類書は山のようにあるが、本書は粒よりの逸品揃いだ。イア、イア！

49. 『ゴシック名訳集成』（全3巻） 東雅夫編 学研M文庫

※ともすると最新の訳を歓迎する当節の風潮にあえて逆らって（!?!）、歴史的な翻訳や往年の名訳ばかりでゴシック・ロマンスの多彩な魅力を紹介しようとしたアンソロジー。平井呈一翁による『オトランド城綺譚』の擬古文訳や日夏耿之介版「大鴉」などを含む1、アラビア幻想の系譜をたどる2、吸血鬼幻想の競演である3……やや上級者向け。

50. 『ゴシック短編小説集』 クリス・ボルディック選 春風社

※こちらはいたってオーソドックスに、遠く現代のポスト・モダン小説にまで及ぶゴシック文学の歴史的変遷を、代表的な作品と詳しい解題によって跡づけている。ここまで俯瞰的なゴシック短篇のアンソロジーは過去になかったので、貴重な大冊といえよう。

51. 『米国ゴシック作品集』 志村正雄編 国書刊行会

※実は世界に冠たるゴシック・エンターテインメント大国であるアメリカ合衆国が生んだ主要な作家、代表的な作品を集成。意外な発見も多々あることだろう。ジェームズ・メリルやエミリ・ディキンソンの詩作品にも、抜かりなく目配りがなされている。

52. 『悪魔の夢 天使の溜息 ウィアード・テイルズ傑作選』 大瀧啓裕編訳 青心社

※アメリカン・パルプホラーの拠点となった伝説の雑誌『ウィアード・テイルズ』掲載作品の中から、とりわけ異彩を放つ名作・怪作・奇作の数々をセレクトした傑作集。『怪奇探偵小説集』や『新青年傑作選』と読み較べてみると、面白い発見があるかも!?

53. 『ニュー・ゴシック』 鈴木晶・森田義信編訳 新潮社

※「ポーの末裔たち」と副題にあるとおり、アメリカ現代文学の旗手たちが描く暗黒と彼岸、グロテスクとアラベスクの物語集。シュルレアリスムもポスト・モダンも、文学の革新者たちは、どうやらゴシック・トラディションが大好物とみえる。

54. 『闇の展览会』（全2巻） カービー・マッコリー編 ハヤカワ文庫

※『ニュー・ゴシック』が純文学寄りの現代ゴシック作品集とすれば、全篇書き下ろしの競作集（アンソロジー＝精華集と競作集は厳密に区別されるべきものです）である本書は、エンターテインメント系の現代ゴシック作品集といえようか。モダンホラーというジャンルの凄味と奥行きと多彩さを、我々日本の読者に最初に教えてくれた本でもある。

55. 『夜の勝利』（全2巻） 高山宏編訳 国書刊行会

※「学魔」の異名をとる英文学者・高山宏が編んだ英国ゴシック詩のアンソロジー。〈ゴシック叢書〉という大部なシリーズだからこそ実現できた、千載一遇の試みといえよう。ピクチュアレスクに由来するゴシック的想像力の原風景を、存分に味わっていただきたい。

56. 『英国ロマン派幻想集』 荒俣宏編訳 国書刊行会

※幻想文学ジャンルにおける、もうひとりの偉大な「宏」たる魔人アラマタの手になる偏愛的アンソロジー。「植物の愛」のエラズマス・ダーウィンや「秘密の共和国」のロバート・カークが、ロセッティ兄妹と肩を並べるアンソロジーとは、その存在自体が、この上なくファンタスティックではないか！

57. 『ヴィクトリア朝妖精物語』 風間賢二編訳 ちくま文庫

※ヴィクトリア朝の英国は、ファンタジー文学の揺籃でもあった。ディケンズ、アンドリュー・ラング、キプリングといった大御所たちの愛すべき妖精譚を集成した本書は、「文豪たちによるフェアリー・テイルズ」のアンソロジーでもあるのだ。

58. 『ドイツ・ロマン派全集 8 月下の幻視者』 前川道介編 国書刊行会

※こちらは、ドイツ・ロマン派のメルヘンを集成した珍重に値するアンソロジー。文豪中の大文豪というべきゲーテも、神秘的な画風で知られるルンゲも、この分野で印象的な作品をものしている。ふしぎ文学の醇乎たる一大源流に、心ゆくまで浸っていただきたい。

59. 『独逸怪奇小説集成』 前川道介訳 国書刊行会

※ゲルマンの幻想と怪奇をこよなく愛した独文学者が、みずからの嗜好のおもむくままに読み漁り、興のおもむくままに翻訳した逸品たちが一巻に集成された、とても贅沢なアンソロジー。知られざる名作佳品と問題作の宝庫でもある。

60. 『ふらんす幻想短篇精華集』 P・ジュールジュ・カステックス編 透土社

※幻想文学の観点から仏文学史を再編する偉業に着手し、大著『ノディエからモーパッサンにいたるフランス幻想譚』を著した碩学による、系統的なフランス幻想小説アンソロジー。日本版オリジナルの夢のある造本にも、御注目を。

61. 『フランス幻想文学傑作選』(全3巻) 窪田般彌・滝田文彦編 白水社

※カステックスのそれを凌駕する規模で編まれた、現時点で最大級のフランス幻想文学アンソロジー。全巻を通読すれば、18世紀から20世紀のシュルレアリスム前夜に至る伝語圏における怪奇幻想文学の変遷を、ほぼ把握することができるはずだ。

62. 『黒いユーモア選集』(全2巻) アンドレ・ブルトン 河出文庫

※シュルレアリスムの法王ブルトンが選んだ、暗黒の哄笑に満ちた文学作品のアンソロジー。本書によって忘却の淵から掬い上げられた作家作品も数多い。また澁澤龍彦鍾愛の一冊でもあり、澁澤の訳業を通じて日本の幻想文学シーンに与えた影響も少なくない。

63. 『ロシア神秘小説集』 川端香男里編 国書刊行会

※19世紀に開花したロシアのロマン主義文学は、ゴシック趣味と神秘主義に妖しく彩られた「ふしぎ文学」の宝庫だった。その精華たるA・K・トルストイの吸血鬼小説三部作をはじめとして、巨匠たちの綴る重厚な幻想と怪奇の世界を味わいたい。

64. 『ロシア怪談集』 沼野充義編 河出文庫

※プーシキンやゴゴリなどの大古典から20世紀のチャヤノフ、ナボコフらに至るまで、たいそうバランスの取れた通史的アンソロジーで、さながらロシア版「文豪怪談傑作選」の趣がある。これ一冊あれば、スラヴ産怪奇小説のエッセンスを体感できるだろう。

65. 『東欧怪談集』 沼野充義編 河出文庫

※『ロシア怪談集』と同じ編者による大労作アンソロジー。多民族の坩堝（るつぼ）にして、複雑怪奇な歴史と宗教風土を有する東欧圏に育まれた幻想と怪奇の逸品が、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ユダヤ、セルビア、マケドニア、ルーマニア、ロシアという地域別に展覧されている。全篇、原語からの直訳であるのも貴重な。

66. 『現代イタリア幻想短篇集』 竹山博英編訳 国書刊行会

※カルヴィーノ、ブツァーティ、ランドルフィ、マレルバなど、奔放自在な着想で読む者を眩惑する大家たちを輩出してきたイタリア幻想文学の精華を収載する、おそらくは本邦唯一のアンソロジー。奇想の王国の真価が、この一巻に。

67. 『スペイン幻想小説傑作集』 東谷穎人編 白水uブックス

※『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスを除いては、おそろしく知名度の低いスペイン文学だが、ベッケルやアラルコンをはじめとして、輪郭の鮮明な怪奇幻想譚の紡ぎ手は決して少なくない。情熱的な南欧の風土が育んだ、ふしぎ物語の数々を御賞味あれ。

68. 『遠い女 ラテンアメリカ短篇集』 木村榮一編訳 国書刊行会

※ラテン・アメリカ文学のアンソロジーは各種刊行されているが、私見によれば本書は、その中で最も「ふしぎ文学」の肌合いにマッチするセレクション。夢のリアリティを追体験させるかのような疾走感のある幻想文学作品が多数収録されていて、心はずませる。

69. 『中国幻想小説傑作集』 竹田晃編 白水uブックス

※芥川龍之介の翻案で有名な唐代伝奇「杜子春の物語」からノーベル文学賞で話題の莫言に至るまで、悠久の歴史を誇る中国幻想文学の代表作を収める通史的アンソロジー。大陸産のふしぎ物語が日本の作家作品に与えた影響の大きさを知る上でも必読である。

70. 『朝鮮幻想小説傑作集』 金学烈・高演義編 白水uブックス

※最も至近な隣国であり、文化的・歴史的な関係においても抜き差しならぬものがありながら、こと文学方面では知られることの少ない朝鮮半島産の幻想文学を収めた、珍重に値するアンソロジー。虚心に読めば、彼我の意外な共通性を発見できることだろう。

事典／ガイドブック

71. 『世界幻想作家事典』 荒俣宏 国書刊行会

※戦後幻想文学紹介／研究の強力な牽引車となった編著者が、独自の視点と問題意識を掲げてまとめあげた里程碑的な力業。後続世代に与えた衝撃は甚大なものがあつた。「引く事典」ではなく「通読する事典」としての価値は、今もなお有効である。

72. 『日本幻想作家事典』 東雅夫・石堂藍 国書刊行会

※雑誌『幻想文学』の編集長と発行人コンビの手になる、幻想文学に特化した日本作家事典。アンリアルを描く文学は等しく幻想文学であるというスタンスで、SFやライトノベル、さらには漫画や映像作品までが蒐集網羅の対象とされている。

73. 『幻想文学大事典』 ジャック・サリヴァン編 国書刊行会

※邦題は「幻想文学」とされているが、実際には「怪奇小説」もしくは「ホラー」の大事典と称すべき内容である。各項目の記述はかなり詳細で、映像分野にも目配りが利いている。邦訳に際して増補された巻末資料の充実ぶりも、特筆に値しよう。

74. 『奇談異聞辞典』 柴田宵曲編 ちくま学芸文庫

※博覧強記で知られた編者が、近世に量産された随筆書や地誌全107種の中から、奇談異聞の類を項目別に抽出し五十音順に配列した、稀有なる辞典／アンソロジー。ふしぎ話の宝庫である近世随筆の世界へ参入するには、得がたい案内役となることだろう。

75. 『世界霊界伝承事典』 ピーター・ヘイニング 柏書房

※著名な怪奇幻想文学アンソロジストである著者の手になる、「幽霊文化史」の大事典。オカルト色はむしろ控えめで、文学や民俗学をはじめとする文化史との関わりに重点が置かれている。欧米を中心とした怪談観や霊魂観の変遷を知るためにも、必読の資料集。

76. 『世界の幻想文学 総解説』 由良君美ほか 自由国民社

※オカルト文学編／神秘文学編／幻想文学編／怪奇文学編という四パートごとに、総数340篇にのぼる作品の粗筋と作者紹介を収録した一大ガイドブック。幻想文学というジャンルにどのような作品があるか、具体的に知ることができる便利な一巻だ。

77. 『幻想文学1500ブックガイド』 幻想文学編集部編 国書刊行会

※イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、ロシア、中国……といった地域別に、総数1500篇の怪奇幻想小説の概要を、「幽霊」「暗黒」「奇蹟」等々のテーマ別ベストテン形式で掲げたガイドブック。澁澤龍彦ほか識者による「私の10選」も併録されている。

78. 『ファンタジー・ブックガイド』 石堂藍 国書刊行会

※『幻想文学』発行人兼ファンタジー批評家として知られる著者が厳選した、内外のファンタジー小説400冊の解説と、「異世界」「魔法」「妖精」ほか26のキーワードによるコラムから成る包括的なガイドブック。率直すぎるコメントの数々に、時々やり。

79. 『日本幻想文学全景』 須永朝彦・東雅夫編 新書館

※古代の神話伝承から現代文学まで、我が国で生み出された怪奇幻想文学の全容をブックガイド形式で展望。特に古典や芸能への目配りが利いている点、審美的セレクションとなっている点は、須永さんならではのだろう。私も分担執筆でお手伝いさせていただいた。

80. 『怪談文芸ハンドブック』 東雅夫 メディアファクトリー

※「怪談とホラーは別物?」「実話と創作の違いは?」等々、怪談と文芸に関心を寄せる初心な読者の疑問に答えて書かれた、水先案内の書。後半では、内外の怪談文学史の変遷が、古代から現代まで具体例に則して概説されている。

評論／研究／エッセイ

81. 『幻想文学論序説』 ツヴェタン・トドロフ 創元ライブラリ

※「幻想」「怪奇」「驚異」という幻想文学の根幹を成す三つの言葉を明確に定義付け、それが物語の中でどのように機能しているかを、具体的な作品に即して仔細に解き明かした、構造主義的な分析による幻想文学理論書。すでに古典の域にある基本図書だ。

82. 『イメージと人間』 ロジェ・カイヨワ 思索社

※「妖精物語から空想科学小説へ」「夢の幻覚をめぐる問題」「ピュロス王のめのう」という魅惑的な三章から成る論文集。すなわち本書は、〈物語〉〈夢〉〈鉱物〉と人間の想像力との関わりを探究した書物なのである。ふしぎ文学の根幹を考えるとときには必読だろう。

83. 『魔術的芸術』 アンドレ・ブルトン 河出書房新社

※シュルレアリスム運動のオーガナイザーであった著者が、世界各地に伝存する土俗の祭具や工芸品から現代の幻想美術までを博搜して成った大著。魔的なものの復権と「日常生活に魔法をかける詩の不思議」(A・パスロン)が高らかに宣揚されている。

84. 『幻想物語の文法』 私市保彦 晶文社

※幻想文学ではなく、あえて幻想物語という言葉を採用したところに、本書の特質が躍如としてゐる。『ギルガメシュ叙事詩』に発する伝承文学から『ゲド戦記』まで——「分身」「迷路」「冥界」「終末幻想」等々のテーマに沿って渉獵する、個性的な幻想文学論。

85. 『ファンタジーの歴史』 リン・カーター 東京創元社

※「アダルト・ファンタジー」を合言葉に、1960～70年代におけるファンタジー文学リバイバルの仕掛人となった著者が綴る欧米ファンタジー通史。19世紀のウィリアム・モリスから現代のヒロイックF TやハイF Tまで、その「中心的伝統」を跡づける。

86. 『新編 別世界通信』 荒俣宏 イースト・プレス

※『ファンタジーの歴史』で文学史的な流れを把握したら、次は本書によって、古来ファンタジーを求めてやまない、我々人類の精神史における夜の側面に参入してみよう。読了したとき、世界が昨日までと違って見えてくるはずだ。巻末のブックリストも素晴らしい。

87. 『恐怖小説史』 エディス・バークヘッド 牧神社

※ゴシック・ロマンスの流行に端を発して、近代英国恐怖派の大家たち(本書執筆時には新進だったが)まで……英米ホラー小説に関する通史的研究の先駆として、夙(つと)に知られる名著。あのラヴクラフトも『文学と超自然的恐怖』執筆にあたり、本書を参照したという。

88. 『ホラー小説大全』 風間賢二 角川選書

※18世紀のゴシック小説からポスト・モダンの現代まで、欧米ホラーの歴史を分かりやすく解説した基本図書。西洋三大モンスター(ドラキュラ/フランケンシュタイン/狼男)に象徴される、ホラーの基本テーマに関する分析も参考になるだろう。作品ガイド付き。

89. 『恐怖の黄金時代』 南條竹則 集英社新書

※四大の使徒ブラックウッド、市井の隠者マッケン、ダンセイニ卿とラヴクラフト師弟、ケンブリッジの学匠怪談作家たち……英国怪奇小説の黄金時代を担った巨匠たちの生涯と作品を、達意の語り口で活写した評伝集。怪奇の血の伝統を熱く実感させる好著である。

90. 『死の舞踏』 スティーヴン・キング バジリコ

※モダンホラーの帝王キングは、いかなる小説や映画や都市伝説に接してホラー・マインドを養い、あの画期的で圧倒的な作品世界を生み出していったのか……実作者の立場から共感をこめて綴られた体験的アメリカン・ホラー文化論。

91. 『フランス幻想文学史』 マルセル・シュネデール 国書刊行会

※幻想文学研究の分野では世界に冠たる批評大国であるフランスだけに、通史的な研究・解説書も数多い。なかでも偉容を誇る、幻想文学史の決定版というべきが本書だ。詩的な幻想小説の書き手としても知られる著者ならではの審美眼が光る。巻末の索引も充実。

92. 『肉体と死と悪魔』 マリオ・プラーツ 国書刊行会

※19世紀ヨーロッパのロマン主義文学と象徴主義や世紀末美術を中心とする「エロスとタナト

スの象徴を散りばめたデカダン文学百科」(澁澤龍彦)。幻想文学批評の大古典として定評ある名著だが、巨大なアンソロジーとしても愉しむことができよう。

93. 『デカダンの想像力』 ジャン・ピエロ 白水社

※19世紀末のフランスに妖しく華ひらいた耽美と頹廢の芸術ムーヴメント——デカダンの精神風土と、そこから生み出された幻想文学の諸相を跡づけた研究書。神秘主義、神話や伝説への憧れ、人工樂園の夢、東洋趣味等々と文学との関わりが展望されている。

94. 『ロマン的魂と夢』 アルベール・ベガン 国文社

※ジャン・パウル、ノヴァーリス、ティーク、ホフマン……近代における幻想文学の一定型を形づくったドイツ・ロマン派の代表的な作家たちの世界を、彼らがひとしく憧憬の対象とした「夢」のモチーフを核に探究した大冊。幻想文学理解に欠かせない必読の書だ。

95. 『幻想文学空間』 今泉文子 ありな書房

※ドイツ幻想文学の全容を見すえた通史は、翻訳も含め現在入手可能な本がない。そんな中で本書は、19世紀末から20世紀前半という限定付きではあるが、怪奇幻想文学隆盛の温床となったドイツの都市空間(ベルリン/ウィーン/プラハ)を論じて、たいそう示唆に富む。

96. 『日本幻想文学史』 須永朝彦 白水社

※「幻想」という言葉の我が国における成立時期から説き起こし、古典文学を中心に近代まで本朝幻想文学のメインストリームを手際よく、なおかつ格調高く概説する。巻末に付された「妖人魔人怨霊キャラクター略事典」の試みも秀逸だ。

97. 『本朝幻想文学縁起』 荒俣宏 工作舎

※欧米の幻想文学や博物学を精力的に渉猟してきた魔人アラマタが、一転して日本の古典世界に目を向け、幻想文学的な観点に立って、説話文学や能楽、人形浄瑠璃などに秘められた魅力を解き明かす……日本幻想文学のルーツを知りたければ、必読の書である。

98. 『銀河と地獄』 川村二郎 講談社学術文庫

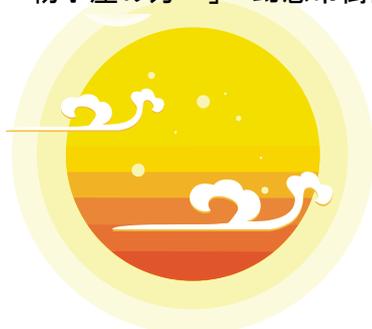
※私の記憶する限り「幻想文学論」と銘打たれた日本作家論集は、本書をもって嚆矢とする。折口信夫、柳田國男、南方熊楠に関する論考が、上田秋成、泉鏡花、藤枝静男、吉行淳之介らのそれと並置された構成にも虚を突かれた。日本幻想文学批評の原点として必読。

99. 『綺想図書館 種村季弘のネオ・ラビリントス8』 種村季弘 河出書房新社

※シブサワ/タネムラと並び称された、「外道の先達」たる著者による日本作家論集。幸田露伴に始まり、泉鏡花、内田百閒、稲垣足穂、日影丈吉ほかの作家たちを闊達自在に論じつつ、東京や金沢や岡山の路地裏や水辺を逍遙する……ふしぎ文学者の精神史としても必読。

100. 『新編・迷子論』 堀切直人 右文書院

※三島、澁澤、川村らの編著によって開示された日本幻想文学の沃野を、いち早く渉猟して数々の蠱惑的なテーマと作品群を採集したのが、若き日の著者であった。とりわけ本書所収の「見世物小屋の方へ」「幻想市街図」「幻の家」といった章の鮮烈な印象は今に忘れがたい。



リストの100冊(シリーズ含む)は、
田原市図書館で貸出・予約可能な資料
です。 2012.12 作成